日中関係新時代を支える観光協力へ「大連アカシア祭り」に合わせてフォーラム開催

中日観光大連ハイレベルフォーラム 友人を訪ねるように活発な交流を

中国・遼寧省の大連市で5月26日から31日までの6日間にわたり、第29回「大連アカシア祭り及び北東アジア国際観光文化祭」が開催されました。

大連アカシア祭りは、「アカシアで友好を結び、観光の発展を促す」ことを主題に、観光と文化交流の活性化と経済発展を目指して1989年から開催されているもので、1992年には当時の中国国家観光局（現在は中国文化・観光部）により、「国家レベルの地方観光イベント」として正式に認定されました。現在も日本や韓国、ロシア、東南アジア各国に加え、台湾・香港・マカオといった中国にとっての主なソースマーケットとなる国・地域からの旅行者だけでなく、大連市民も楽しめる大型国際イベントとして、毎年大きな注目を集めています。

第29回「大連アカシア祭り」の華やかな開会式

多くの関係者が集まった「ハイレベルフォーラム」

今年は大連アカシア祭り期間中の5月27日と28日の両日、「中日観光大連ハイレベルフォーラム」と「北前船寄港地フォーラム大連大会」も併催され、日中間の観光交流拡大に向けて様々な角度から議論が深められました。

ハイレベルフォーラムで基調講演を行った中国観光研究院の戴斌院長は、「日中平和友好条約締結40周年の年に李克強総理が訪日を果たし、安倍首相は『日中関係はすでに新たな段階に入っている』と宣言しました。この『新時代を迎えている』はまさに観光を含む社会各界の共通認識となっています」と強調。「人々の間で友人を訪ねるように交流が活発になれば、指導者と政治家の戦略構想はより簡単に実現できるようになるでしょう」と指摘しました。

戴斌院長は「今後、中日両国の間ではさらに多くの国民が行き来し、親しくなっていくと信じています。数世代、数百年、数千年の歴史や伝統のように、観光と交流の中で心から友情を愉しみ、見識を深めていけば、お互いに深い友情を結ぶことができると思います」と語り、「美しい理想と壮大な目標に比べ、現実ではさらに多くの改善と向上を図る必要があることにも目を向けなければなりません」と訴えています。

中国観光研究院の戴斌院長

フォーラムでの議論に熱心に耳を傾ける参加者ら

効果的な観光交流の協力体制を構築

同院長によると、訪日中国人旅行者数と消費額は過去5年間で年間平均44％増と38％増（いずれも推計値）の伸びを示し、2017年には、それぞれ、793万人と1億6600億円（いずれも推計値）に達しました。しかし、旅行者の満足度

は、旅行者数や消費額と同じように高まってきてはいません。2013年から2017年までの満足度を時系列でみると、80・00、78・54、78・06、77・63、78・39で推移しており、78・5前後の水準で推移しているものの、旅行者数や消費額の伸びとは必ずしも連動していないのが実状です。この水準は、中国人旅行者の主要目的地27の中では10位前後にとどまっています。

また、訪中日本人旅行者数は過去5年間で年間平均2％減（推計値）とマイナスが続く一方、消費額は逆に年間平均6％増（推計値）とプラスを維持してきており、2017年は、それぞれ、268万人と5700億円（いずれも推計値）を記録しています。旅行者の満足度は、平均的に80以上の水準に達しているものの、他の主要ソースマーケットの国々を下回っています。

戴斌院長は、こうした状況を踏まえて「両国政府、特に観光文化部門が共に努力し、国家レベルの戦略について相互信頼を深め、国民への宣伝プロモーションを強化し、友好と善意をアピールしていく必要があります」と指摘。両国の研究・教育・データ分析機関が交流を拡充し、より広範囲でより深いレベルの共通認識を育成し、必要な観光ビッグデータと専門情報を共有することで、「観光投資機関と市場の主体が深く、広く、現実的に意見を交換し合い、安定した効果的な観光交流協力体制を構築しなければなりません」と呼びかけました。

モノだけでなく文化も運んだ北前船

アジアでも最大規模という大連の星海広場

北前船寄港地フォーラム 海や港を舞台に交流発展の連携へ

一般社団法人北前船交流拡大機構が主催する北前船寄港地フォーラムは、江戸時代に大阪港から瀬戸内海を通り、本州の最西端である下関を経て、日本海を北上し、北海道にいたる2500キロに及ぶ海上交易ルートを航行していた北前船の寄港地だった地方自治体と民間有志らが、この海上交易ルートの賑わいを復活させようと10年ほど前にスタートしました。

23回目を迎えた今年は大連で開催され、初めての国外でのフォーラムとなっています。

元国土交通省次官で北前船交流拡大機構の会長を務める岩村敬氏は、「中国東北地方の玄関口として繁栄し、かつては船で日本の各地とも結ばれていた大連が、今回のフォーラム開催を機に北前船寄港地とともに一大観光回遊ルートに組み込まれ、地域が発展することを期待します」と表明。同機構の評議員議長でフォーラムの議長も務める作家の石川好氏も、「北前船寄港地フォーラムが海を渡り、大連で開催された事実は、中国の一帯一路構想につながり、北東アジアに新しい交易圏が誕生することになると信じて疑いません」と期待を示しました。

異国情緒が色濃く漂う大連のロシア風情街

中国駐東京観光代表処の王偉首席代表は、江戸時代の日本版〝海のシルクロード〟とも呼ばれる北前船について、「中国大陸には来ていませんでしたが、物流のための交通路としてだけでなく、人や食、文化などあらゆるものが交流して融合し、新たな価値を生み出したという北前船航路は、異なる文化圏を結んだ平和の道とも言えるもの」と指摘。さらに「大連は古くから中国における海の玄関口であり、日本との往来も非常に多く、中国・ロシア・日本などの文化が融合した美しい街並みもあります。その大連で日本版〝海のシルクロード〟と本家の〝海のシルクロード〟が交わることにより、新たな出会いや価値がもたらされることになります。北前船寄港地フォーラムが大連で開催されたのを機に、海や港を舞台にした新しい日中間の観光交流が発展していくよう、旅行業界をはじめ日本側の関係各方面と連携を強めていきたい」と王首席代表は語っています。

10本の道路が放射状に延びる大連の中山広場

中国駐東京観光代表処